

学力の衰えと直面する高齢英語学習者

糸 井 江 美

(文教大学文学部)

Learning English for Older Adult Learners: Age Related Factors and Barriers to Learning

ITOI EMI

(Faculty of Language and Literature, Bunkyo University)

要 旨

少子高齢化社会を迎え、高齢になって英語を再び学びたいと願う人たちが増えてきた。加齢にともない短期記憶力の衰え、聴力、視力の衰えを感じる人も多いが、高齢学習者は豊かな人生経験、優れた他者との関係作りなど英語学習に有利な点を生かすことができる。今後、大学や専門学校をはじめ、自治体の生涯学習課等では高齢者の特質、ニーズにあった学習環境を整える必要がある。

はじめに

「学力問題」は多くの場合、学校教育での「学力低下問題」として捉えられ、小学生から大学生までもが学力低下問題の対象となっている(刈谷2002、中井 2001)。しかし「学力問題」は若者だけの問題に留まらない。高齢になり英語と再び向き合うことを決意した高齢者^{注1)}は、自らの学力低下、つまり「学習能力の低下」を自覚することになる。本論では、「学力」を高齢者の「学習能力」と狭義に捉え、少子高齢化で今後益々増加が予想される高齢英語学習者の問題点を探り、生涯学習としてのより豊かな英語教育のあり方を考える。

「早期英語教育と高齢者英語教育」

総務省の報告によると2005年の9月に全国

の65歳以上の高齢者が総人口の2割に達し、2004年の時点、高齢者の就業割合は19.4%で、米国(13.9%)やフランス(1.2%)よりその割合は高くなっている(朝日新聞 2005, 9/19)。また、「団塊の世代」の大量退職が2007年から始まるのを見込んで、少子化に悩むいくつかの大学では高齢者を学生として受け入れる準備を進めており(朝日新聞 2005, 9/22)^{注2)}、近い将来多くの高齢者が再びキャンパスで学ぶことが予想される。

定年退職後は、海外旅行や海外でのロングステイを計画している人も多く、そのために英語の必要性を感じている人もいる。しかし、残念ながら多くの方は、「外国語の学習は若ければ若いほど効果的であり、高齢になってからの英語学習は困難である」という俗説が根拠もない不当なものだと思わない。高齢者

にとって最大の学習障害は、学習者と指導者の心の中に潜む「高齢者が新たに言語を学ぶことができるのか」という疑いの気持ちである (Schleppegrell 1987)。

現在、日本の英語教育界では「公立小学校への教科としての英語教育導入」が大きな議論を呼んでおり (大津2004、金森2004)、過熱気味な「早期英語教育」へ期待は、加齢と共に語学学習能力が低下するという俗説に容易に結び付けられ、英語を学ぼうとしている高齢者にとっては学習意欲を殺される向かい風となる。

また、一大決心をして若者に混じって英語学習を再開した高齢者を待っているのは短期記憶に優れた子どもや若者に適した学習プログラムや指導法であり、そのような指導法しか経験のない指導者は「言語学習者として高齢者は劣る」という偏見を持ちかねない。高齢者にとって不適切な指導法は、リスニング力に重点を置いたもの (高齢者によっては聴力に衰えがみられることがある)、スピードと短期暗記力が要求されるドリル練習などである (Schleppegrell 1987)。指導者は高齢者にとって「新しいこと」を教える場合、高齢者の今までの経験や知識に「新しいこと」を関連づける工夫が必要だ。

幸いなことに、脳科学の発達により大人の脳は子どもの脳とは違った学習方法をとるが、健康であり環境が整っていれば加齢によって学習能力自体が衰えることはないことが分かってきた (Sylwester, 2005)。川島の実験は認知症になってしまった高齢者でさえ、計算や国語の学習を長く続けることにより、前頭前野の働きが活発になることを示している (川島 2003)。今後も脳科学の急速な発達が予測され、加齢と学習能力の関係がより明確になり、高齢者に朗報がもたらされることが期待される。

加齢に伴い脳の働き方が変化するならば、指導者は当然高齢者に適した方法で指導する

必要がある。それに関して、Schleppegrellは高齢者が満足いく言語学習のためには3つのことが重要だと主張している (Schleppegrell 1987)。まず、情意的な障害をなくすこと。一般的に強い学習動機と自信が言語学習には重要であるが、高齢者は高齢になってからの語学学習は無理だという思い込みや失敗の経験から自信をなくしている可能性がある。指導者は、高齢学習者の不安を取り除き自信をつけさせるような工夫をすることが必要である。次に重要なことは、教材選びである。英語学習のための本や雑誌は本屋に溢れているが、その多くは若い学生や社会人を対象としており、市販されているものから高齢者に適するテキストを探すことは至難の業だ。指導者は高齢者の学習能力の特性を考えた上で、彼女/彼らの興味やニーズに合った教材を選ばなくてはならない。最後に、高齢者は長年の経験から自分に最適な学習方法を身につけている場合が多く、指導者はそれに対して寛容に対応し、高齢者特有の学習ストラテジーの活用を学習者に勧めることも大切である。

「高齢英語学習者が自ら自覚する学習能力」

「学習能力」は学習する当事者の自覚、認識を抜きには語れない。今回、高齢学習者が学習能力の衰えをどのように捉えているのかを知るために、私がボランティアで教えている英語学習者に協力を願い、アンケートに答えてもらった。中高年を対象に埼玉県のある山村の役場施設で英語を教え始めてから半年が経過した現在、受講者は10名である (50代の女性が3名、60代の女性が2名、男性が2名、70代の女性が2名、男性が1名)。本論では高齢者を60歳以上として捉えているが、このアンケート調査には50歳代の女性が3名含まれている。アンケート回答者の英語レベルには、大きな開きがある。受講者募集時に入門者対象と宣伝した為、ABCも分からない人が1名 (60代女性)、ABCは読めてもまったく英

語の文章は読み書きができない人が2名(60代女性、70代女性)いる一方、進駐軍基地内での勤めが長く流暢な英語を話す人が2名(70代の男性と女性)のクラスとなった。村内には他に英語を学習する場がまったくないため、入門クラスにも中上級の人が参加希望したと考えられる。

アンケートの質問事項は以下の4点である。

1. 若いときに比べて英語学習に有利な点、容易だと感じる点は何か；
2. 若いときに比べて英語学習に不利な点、困難に感じる点；
3. 英語を学ぼうとした動機；
4. クラスへの期待、講師への要望

1人の欠席者がいたため、回答者は9名である。今回は「学力」つまり「英語学習能力」に直接関係のある設問の1, 2に関する結果を報告する。

「若いときに比べ英語学習に有利な点や容易に感じる点はない」と答えたのは50代の女性1人と70代の男性1人である。時間的余裕が有利な点としてあげた人は4名(60代男性2人、60代女性1人、70代女性1人)。「新聞を読んだりして、英語の単語など聞いたことのある言葉が若い人より多いと思う。学生時代の基礎が今も忘れずに使えることが有利(原文通り)」と回答したのは50代の女性の1人であった。もう1人の50代の女性は、「人間関係を円滑に行なえる(原文通り)」ことが有利な点だとしている。

受講者の大半は定年退職者であり、平日の午前中にクラスに通える環境にある。また、村では子どもが村を離れたため一人暮らしの高齢者も多い。英語の受講者にも一人暮らしの人は多く、時間的余裕があるために英語以外にも陶芸、習字などの公民館サークルに属している人が複数いる。時間がある利点は、家庭でも学習する時間が十分にあり、焦ることなく繰り返し学習できることである。

人生経験の長さや人間関係を円滑に行なえ

る能力は若者に比較すると英語学習に有利だと学習者は自覚しており、それを英語学習に有効に役立てることができる。例えば、単語を覚える場合、私はそれぞれの受講者に「自分の好きな言葉、何か思い出のある言葉」を辞書で選んできてもらう。一人ずつが数個の単語を持ち寄り、それを次回のクラスで一覧表にして全員に渡し、自分が選んだ単語について、意味や背景知識を話してもらうと、他の受講者も「その単語知っている」「聞いたことあったけど、そんな意味だったのか」とお互いにコメントし合いながら学習が進んでいく。これは、人生経験が長いだけ高齢者の話は脱線し長くなりがちだが、新しい知識を昔から蓄積してきた知識に関連付けて覚えられる有効な方法だといえる。また、クラスで発表し、仲間と意見交換することでお互いを認め合う環境が生まれる。

設問の2番で挙げられた不利で困難な点は、「覚えが悪い(5名)」、「小さな字が読めない(1人)」、「外来語の誤解が多い(1人)」である。「小さな字が読めない」悩みは早ければ40歳代から聞かれる。また60歳代以上になると聴力の低下が現れる人もいる。これらの学習困難点は、プリントの字を大きくする、大きな声でゆっくり話すなどという指導者のちょっとした心遣いで解決できることである。黒板やホワイトボードへの板書をするときにも、字の大きさだけでなく、何色を使うのか、筆記体^{※3)}がいいのか、活字体がいいのかという考慮は必要である。「外来語の誤解」の悩みは、これを逆手に取り学習に利用することができる。身近なカタカナ語を学習者自身が拾い集め、日本語ではどう表現できるかをクラスで発表すると、自主研究、人前での発表の練習になるだけでなく、他のクラスメイトに知識を分け与えることになる。

「覚えが悪い」という悩みは高齢者に限らず、中年期以降の共通した悩みであるように思われる。加齢により脳の機能は変化し、短

期記憶の能力が減少するといわれるが、たとえ減少しても他の脳機能がそれをカバーする働きをすると考えられている(川島 2003)。また記憶は脳の一箇所に蓄積されるわけでもなく、新しい情報が入ると古くて使われなかった記憶は薄れていく運命にある。記憶に留めたい情報については、映像化する、シンボル化する、話す、書く、聴く、歌うなど多様な感覚機能を総動員すると効果的である(Schmidt 2004, Wolfe 2001)。そして体験すること、つまり英語学習では実際のコミュニケーションで使ってみること、肉体的にも心理的にもストレスのない安心できる環境で学習することが最も効果的な学習方法である(Wolfe, 2001)。

9名の回答者の中で、ある60代の女性は「こんな難しいことは分からない」とまったくアンケートに答えを書こうとしなかった。私の想像では、彼女はアンケートに非協力的であったのではなく、文章を読んで内容を理解し、それに答えること自体が難しく感じたのだと思う。山村の過疎地域では、戦後も高等教育を受ける機会、つまり本を読んだり勉強したりする機会が少なかったため、知識や情報を系統的に積み上げていくことを経験していない人がいる。近所に住む60代後半の女性の話によると、彼女が若いころは家業の紙すきを手伝わされ、本を読むことが家では禁止されていた。どうしても読みたかった「小公女」は土蔵の中に隠れて薄明かりを頼りに読んだという。アンケートに答えることができなかった女性も同じような境遇で育ち、十分な学校教育を受けることができなかったのかもしれない。彼女に口頭で「どうして英語を勉強したいと思ったのですか」と尋ねてみると、「ABCぐらい分かりたいからね」という答えであった。その言葉からアルファベットがまったく読めない世界を想像してみた。人口8千人ほどの山村では商店はまばらであるが、気をつけて車を運転しているといたと

ころでアルファベットの看板に出くわす。それはガソリンスタンドやコンビニの看板、農協の看板であったりするのだが、彼女にとってそれはまったく発音することもできない、意味も分からない模様でしかない。社会からの疎外感、つまり自分以外のほとんどの人が理解しているアルファベット文字が溢れる社会に住んでいる気持ちは想像しがたいものがある。

「出版物から見た高齢英語学習者の学習能力」

団塊の世代が近々定年を迎えることを反映してか、この1年で相次いで「大人」を対象とした計算や音読などさまざまな種類の学習ドリル(プリント)がシリーズで出版され、その中に英語学習書も登場した(英会話のジオス 2005、尾島2005、吉田 2005)。出版ラッシュの背景は、高齢英語学習者がこの1年で急増したというよりはむしろ中高年を中心に認知症予防への興味が広がっているからではないだろうか。

尾島、吉田の英語プリントでは筆記体で書かれた英文(薄く印刷されている)を学習者が上からなぞるようになっている。昔から言葉や漢字を覚えるためになぞり書きをし、「手に記憶させる」といわれていたようにここでも「手」に英語をしみこませようというのだ(吉田 2005)。また吉田は「音が命の英語ですから、音読をしっかりやって、なぞり書きをして、記憶に少しでも定着させて」と高齢者のための効果的な学習方法を提案している(吉田 2005, p3)。同じ小学館から約1ヶ月遅れで出版された尾島の英語プリントも基本的には同じで薄く印刷された筆記体の英文をなぞり書きし、英語を「声に出して」「書いて」「聞いて」脳を活性化させることを目的としている。

一方、ジオスが出版している「いつでも入門 大人のはじめて英会話」も活字が大きいことや登場人物、場面設定から対象が中高年

であることは明らかであるが、前述のドリルやプリントのような脳の活性化を目的としているのではなく、あくまでも英会話を楽しく習得することが主目的となっている。

「高齢者にとっての英語学習」

学校教育ではあまりにも「使える英語」が強調されている。教員も「使えないような英語を教えるな」と迫られる。しかし、高齢英語学習者にはさまざまな学習動機、ニーズがあり、それは必ずしも「使える英語の習得」を意味していない。海外旅行で使える英語能力を目標にしている高齢学習者ももちろんいるのだが、私が見聞する限りでは英語を学習する目的は、高齢になるほど他者との交流、脳の活性化が主な目的となってくる。「使える英語」というよりは、高齢者にとっては音読したり、テープを聴いたり、なぞり書きしたりすることによって「感じる事ができる英語」であり、「他者と触れあうための英語」である。

長い間18歳人口のみをターゲットにしてきた大学、短大、専門学校を始め、カルチャーセンター、自治体の生涯学習課でも積極的に高齢者に学習の場を提供し、もっと英語学習が身近なものになるように努める必要があるだろう。大学や専門学校では、高齢者が新たに身につける知識や技術を使い人生のセカンドステージで活躍できるように援助し、また自治体の生涯学習課などでは、英語の上達、習得を目指すことだけでなく、英語そのものを楽しみ、認知症にならない手段として、また孤独な生活を送りがちな高齢者が他者と交流する場としての英語学習環境を提供することが望ましい。

結 び

小学校では、「基礎、基本の学力」と「自ら学ぶ力」を身につけることが大きな教育の柱となっているが、高齢者にとっては、すで

に身につけた「基礎、基本の学力」と「今まで生きてきた力、経験」を最大限に活用し、第二の人生をより豊かに生きることが大きな学習目標となる。われわれ研究者には、高齢学習者全体の実態を調査し、それぞれの環境、レベルにあった教材、教授法を開発していくことが求められる。

注1)「高齢者」とは何歳なのかは議論の余地があるが本論では60歳代以上を想定している。

注2) 関西国際大学では2006年春から「60歳以上」を対象にした「シニア特別選考」を行うことに決めた。

注3) 現在中学・高校では筆記体を教えなくなったが、高齢者は逆に筆記体に慣れ親しんでいる。

引用文献

- 朝日新聞「65歳以上5人に1人 先進国の最高水準」2005, 9/19朝刊
- 朝日新聞「定年後はキャンパスへ 団塊世代向け『特別選考』関西国際大学」2005, 9/22 朝刊
- 英会話のジオス『いつでも入門 大人のはじめて英会話』ジオス, 2005
- 大津由紀雄『小学校での英語教育は必要か』慶應義塾大学出版会, 2004
- 尾島恵子『英語プリント 元気が出るこつこつ英語練習帳』小学館, 2005
- 金森 強『英語力幻想』アルク, 2004
- 刈谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書, 2002
- 川島隆太『脳を育て、夢をかなえる』くもん出版, 2003
- 中井浩一(編),「中央公論」編集部『論争・学力崩壊』中公新書ラクレ, 2001
- 吉田正幸「吉田正幸の脳いきいき! 大人の英語プリント」小学館 2005 書房

Schleppegrell, M. 1987. The older language learner.

www.ericdigests.org/pre-927/older.htm

Schmidt-Fajlik, R. 2004. Multiple Intelligences and lifelong language learning. *The Language Teacher*, 28 (8), pp 19-24.

Sylwester, R. 2005. The role of wisdom in intelligence: The reward for an

intellectually stimulating life. Brain Connection. The Brain and Learning.

www.brainconnection.com/content/216_1/printable

Wolfe, P. 2001. Brain research and education: Fad or Foundation? Brain Connection : The Brain and Learning.

www.brainconnection.com/content/160_1/printable